

倉橋惣三との対話③

「森の幼稚園」という理想（その1）

浜口順子

（大学教員）

二十九歳の倉橋先生が夢見た「森の幼稚園」

「森の幼稚園」と聞くと、現代の私たちは、一九五〇年代にデンマークで始まったという、自然の恩恵を受けながら野外中心で保育する園のことを思い浮かべるでしょう（倉橋先生はもちろん、ご存じないですね）。北欧やドイツでは公式に認可された「森の幼稚園」が普及していますが、日本ではまだ公的に認められたものはほとんどなく、多くが自主保育型のものなので、認可幼稚園とは区別して「森のようちえん」と書くことが多いようです。それでも、ここ最近、自然体験が乏しくなっている現代の子どもたちに豊かな自然環境の中で保育を提供する取り組みは、かなり着目されるようになってきました。全国的な「森のようちえん」ネットワークというものもあります。

ところで、この「森の幼稚園」という名前を初めて使ったのは、倉橋先生ではないでしょうか。百年以上も前の一九二二（明治四十五）年、先生がまだ二十九歳という若者でいらした頃、『婦人と子ども』誌（本誌の前身）第十二巻第一〜六号に、「SK生」という筆名のもと、「森の幼稚園」という架空の幼稚園のお話が六回にわたって連載されました（倉橋惣三『幼稚園雑草』に再録）。

その一年半前の一九一〇年に先生は、東京女子高等師範学校に児童心理学の講師として赴任されましたが、その後、大変な勢いで、幼児教育のみならず、心理学、社会学、生理学など古今東西の文献を読みあさり、欧米の教育事情を熱心に吸収したのだと思います。若き先生が、海外文献や外国の事情紹介、心理学や子育てに関する解説、随想などを、本誌はじめ多くの学会誌や雑誌に投稿しているのを読みますと、わが身が縮む思いです。その頃から都会の子どもたちの貧困や不衛生、そして自然からの乖離かひりによる心身の発達のゆがみ、不自然な生活形態などを深く危惧し、社会教育や福祉による介入の必要性について発言していらしたのですね。

フィクションの「森の幼稚園」(一九二二年一月号)

そんな中で、こんな幼稚園があつたらいいと夢をつづったのが、「森の幼稚園」でした。その最初の部分は次のような文章です。

先生がこの幼稚園を開かれてから、もう大分の歳月になります。入口の檜の木を門に利用して、小さな標札が懸けてあるけれども、近所では幼稚園の名をいう人がありません。森の幼稚園で通っています。同様に先生の名をいう人もありません。森の先生で通っています。

いかにも通称とほりなの示す通り、森の先生に相違ないのです。皆さんが△△△の停車場で電車を降りて南へとって二三丁行かれると、もうこの森の頭が見えます。以前は何の土地であったのか、広い広い森と、それに連る起伏多い畑地とが、この幼稚園の敷地なのです。この広い敷地の中に、日当りのよい洋風の平屋建と、わらぶぎの家が三軒あります。洋風の方が幼稚園で、わらぶぎの中で比較的大きいのが先生

の住宅です。先生はこの質素な家に、奥さんと、末のお嬢さんと、忠実な僕婢等とで、極めて平和な生活をして、専心幼稚園のために尽しておられます。(p.84)

この「先生」は、かつて大学の有名な教育学の教授だったのですが、急に「郊外に引込んで幼稚園などを始められる」というので、「当時は社会から随分意外なことに思われた」とのこと。「御自身この幼稚園を始められることを何ら奇なこととも思って」おらず、「今ではかつて大学生から敬慕せられたと同じように、かわいい幼児たちの、親しみと、なつかしみとの中心になって」いるのだといえます(p.85)。この園がどんな幼稚園なのかは、後で詳しくお話したいのですが、「森の幼稚園」という名の通り、「人間、わけても子供の性情の上に及ぼす自然の感化について」たいへん重視していて、園芸主任という役割の人が大事な一員になっています(p.90)。

現実の「森の幼稚園」との出会い(一九二二年二月号)

倉橋先生は、この九年後(一九二二年)に再び「森の幼稚園」という題の小文を本誌に投稿しておられますね。『倉橋惣三選集 第二巻』(一九六五年)の『幼稚園雑草』には、「ドナー・グロープの幼稚園」として収められています。一九一九年から先生は欧米視察留学に出て、この文章のつづられた書簡は、シカゴから、留学終了直前の年末十二月三十日付で送られました。当時、三十九歳になっていた倉橋先生は、その幼稚園を訪問した際のいたく感動された様子を生き生きと伝えています。

コロンビア大学の幼稚園も、シカゴ大学の幼稚園も、ゆっくりと見せてもらいました。(略)一つとして有益な資料でないものはありません。しかしその中で、——なんといいましようか——私の一番好きなどでもいわせて頂きましょうか、とにかく最も私の心をひいた幼稚園が一つありました。(p.401)

シカゴの幼稚園を視察した際、アメリカの幼稚園の印象を聞かれ、「大きい都会の幼稚園は自然味のあまりに少ないのが遺憾に思える」、しかし「それが無理な注文」であって「出来るのをしないのでなく、出来ないから仕方がない」ということもわかっていると答えると、それならと、ヘミングウェイ女史という方が「きつとあなたのお気に入ります」と紹介してくださいだったので、ドナー・グロープの幼稚園だったわけですね (p.402)。

そして、先生は天気の良い五月(金曜日ですね)に出かけます。シカゴのユニオン駅から汽車で、「汚いシカゴの裏町」を抜け、やがて青い野が打ち展がり、丘や林、小川を車窓から望みながら、いえ「望む」などという余裕はなく、きつと先生自身は吸い込まれるように見入り、みるみる自然の力で癒されていくのを実感され、またいかに自分自身が都会生活の中でどこか緊張していたことを悟っていたのではないのでしょうか。

沿線の停車場の名も、そのところどころの趣きにふさわしく呼ばれていました。野(フィールド)、丘(ヒル)、谷(テール)、小川(リバー)、森(グロープ)というような語がそれぞれにつけてありました。こんなことも時には非常にうれしいものです。一時間ばかりにして、私はドナー・グロープの小さい停車場に着きました。(p.403) ———— 続く ————

注 引用はすべて『倉橋惣三選集第二巻』(フレールベル館一九六五年)所収の『幼稚園雑草』によります。